

厚木市初のソーラーシェアリング

▶1月11日

(神奈川県厚木市)

神奈川県丹沢山麓南東部、厚木市飯山地区は、相模川の支流である小鮎川沿いに田んぼが広がっている。1月11日、今は稲の刈り株だけが残る田んぼのあちこちに、どんどん焼きで焚かれる正月飾りなどが積み上げられていた。これから団子を焼いて食べ、無病息災を願うのだろう。

同じ11日、川筋からちよつと上った場所にある畑で、あつぎ市民発電所（一般社団法人、理事長・遠藤睦子さん）の通電式が開かれた。周辺は住宅と畑地が点在する。テープカットは1月11日11時11分11秒の1並び（多少はズレたらしい）。月は違うが「3・11」と同じ日付を選んだのかもしれない。

式参加者の間からは「このあと、どんど焼きに行く」といった声も聞こえてきた。「市民電力」に賛同する人たちの横顔を垣間見た気がする。

売電先として新電力を選択

市民レベルで環境問題の解決をめざすグループが、厚木市内には数団体ある。横の連携を求めて「あつぎ環境ネットワーク」が立ち上げられたのは2018年。グループ共通のテーマとして「太陽光を中心とした再生可能エネルギーの普及・啓発」が掲げられる。市民発電所計画はこ

うして始まった。

農水省が発表したソーラーシェアリング（営農型太陽光発電）の許可件数（稼働件数とは異なる）は、18年3月末時点で1905件にのぼる。このうち神奈川県は26件。千葉312件、群馬214件、静岡210件のトップ3と比べると、隔たりは大きい。

神奈川県では西部の小田原市周辺を中心に、ソーラーシェアリングの導入が16年ごろから始まった。栽培作物は、ホンサカキが件数にして3分の2を占める。あつぎ市民発電所は、ミカンや酒米の栽培を通して地域おこしに取り組むF&Eあしがら金太郎電力（小田原かなごてファーム）ともネットワークを組んだ。

今回通電を開始した発電施設の設置面積は385㎡、パネル数120W×219枚。パワコン出力19.8kW。費用総額は約700万円。FIT（再生可能エネルギーの固定価格買取）は18円/kWh。売電収入は年間約60万円を見込んでいる。

販売先は、特定卸供給という仕組みを使って新電力

小売りのひとつ「みんな電力㈱」を選択した。この仕組みでは、あつぎ市民発電所のような特定の発電事業者を指定して消費者が電気を買うことができる。

「（原発事故を起こした）東電傘下の送配電事業者には売りたいくなかった」（遠藤さん）

資金は、市民から提供された基金が中心になった。拠出者は143人、総額約400万円。あとは寄付金や役員からの借り入れ。厚木市からは20万円の補助があった。基金返還は17年後を予定しているという。



耐風性が高いスリムパネルを採用。南西端側は隣民家の日差しに配慮して撤去している。

実験農園として 後進の参考にも

発電用農地は、副理事長でもある落合清春さんが提供した。この落合農園で、昨秋には収穫祭も催されている。ご自身は、長く小学校教員を務めた画家でもある。当日はサツマイモの白い粉末を持参された。地元の年寄たちが昔食べていたもので、団子になるとイカ墨のように真っ黒になるらしい。こうした6次化への取り組みや販路拡大も、落合さんは今回のプロジェクトに伴う課題として挙げていた。ちなみに昨年後半期の農業販売収益は約10万円。

■パネル下での作付け例

遮光率	↑北 区角割り	
	62%	D-1 ミョウガ
47%	C-1 落花生	C-2 サツマイモ
39%	B-1 ジャガイモ	B-2 サツマイモ
32%	A-1 サトイモ	A-2 サツマイモ
	↓南	



遠藤睦子さん



落合清春さん



東光弘さん



yaeさん。鴨川自然王国を主宰。昨年狩猟免許取得、この正月にはイノシシ4頭を捕獲したとか。



坂田雅子さん。群馬県水上市在住。現在は、「核の棺」と地球温暖化に揺れるマーシャル諸島をテーマに映画制作中。

電気も食も 人をつなぐメディア

通電式第2部は会場を移して厚木市民文化会館で行なわれた。参加者は第1部よりさらに増えて、用意さ

農援隊)をつくらうと思っています」

すが、今後20年間農業を続けられるとは思っていない。協力者や後継者を確保して営農集団(海援隊ならぬ

か。実験農場と考えています。ローテーションを組んで栽培し、データを積み重ね、あとに続く人たちの助けにもなりたい。ソーラーシェアリングには20年間の営農義務がありま

す。わたしは63歳になったばかりですが、今後20年間農業を続けられるとは思っていない。協力者や後継者を確保して営農集団(海援隊ならぬ

「厚木市初にはこだわりました。太陽光パネルによる遮光という条件のもとで、どれだけ収量を確保できるか。実験農場と考えています。ロー

テーションを組んで栽培し、データを積み重ね、あとに続く人たちの助けにもなりたい。ソーラーシェアリングには20年間の営農義務がありま

す。わたしは63歳になったばかりですが、今後20年間農業を続けられるとは思っていない。協力者や後継者を確保して営農集団(海援隊ならぬ

れた会場からあふれるほど。1部と2部を合わせて参加者は135人へのほる。市民の関心の高さがうかがえた。

記念講演をされたのは、市民エネルギーちば(株)代表の東光弘さん、「半農半歌手」ともいわれるyaeさん、ドキュメンタリー映画監督の坂田雅子さん。いわば、あつぎ市民発電所の応援団でもある。yaeさんは、ご自身の生活を語りながら2曲を披露。坂田さんは作品「Morgan、明日」にからめ、脱原発についての思いを語った。

東さんは今回のプロジェクトに施工面でも関わっている。講演は、昨秋の台風15号にからめて展開された。当時、千葉県一帯は大きな被害を受け、長期間の停電は記憶に生々しい。幸い、匝瑳市にある市民エネルギーちばのソーラーシェアリング施設は強風にも耐えた。東さんたちは無料充電所を設置。太陽光パネルの無料貸し出しも実施して支援体制を組んだ。

「台風15号では、近所のゴルフ場に設置された風速計が54m/秒を指して倒れていました。停電が続くと心が削られていく。先が見えないのはキツイ。充電所は、手伝ってくれたベトナムの若者と近所の年寄が仲良く集う井戸端会議の場ともなりました。食だけでなく電気も、人をつなぐメディアになる。ソーラーシェアリングは、発電と営農だけではありません。共生。まで行つてこそソーラーシェアリングです」

東さんからは、「井戸端災害ステーション」「近所電力」「送電線のない村」といった構想がいくつも飛び出した。そこには、災害に耐えるという暗いイメージはない。むしろコミュニケーションの場として設定されているように思えた。

災害時だけに限らず、まさしく電気と食、ソーラーシェアリングは人をつなぐ。あつぎ市民発電所の取り組みをきっかけにして、県央部にもソーラーシェアリングが広がっていくかもしれない。(八木誠一)